

十種法行について（舟橋）

十種法行について

舟橋尚哉

菩薩行の一つとして説かれている十種法行 (daśaśūtra dharmacāra) は十法行とも十種正行ともいわれるが、中辺分別論、無上乘品の作意正行を説くところに、次の如き十種法行が説かれている。

「十種法行とは何か、(1)書写 (lekhanā) と(2)供養 (pūjāna) と(3)布施 (dāna) と(4)聴聞 (śravaṇa) と(5)読誦 (vacana) と(6)受持 (udgraha) と(7)解説 (prakāśana) と(8)諷誦 (svādhyāya) と(9)思惟 (cintānā) と(10)修習 (bhāvanā) とにある」(第九偈) この十種法行(十種正行)は、大乘莊嚴經論、行住品には「有十種正行。一書写。二供養。三流伝。四聴受。五転読。六教他。七習誦。八解説。九思釈。十修習」(大正三一、六五九下)とあつて、十種正行の一一の名称が説かれているが、梵本並びにチベット訳では「十法行においふ」(daśaśū dharmacāriesu)と説かれているのみで、その説明はない。

次に瑜伽論卷七十四に出ている十法行を考察してみよう。勿論、梵本はないので、チベット訳から梵語を推定することにする。

「大乘におけるこれら諸菩薩の十法行は、有情を成熟せしめるものである。十とは何かといわば、即ち、大乘と相応する菩薩蔵によつて撰せられた経等の法を、(1)書写 (lekhanā) して持すると、(2)同様に供養 (pūjāna) すると、(3)他に布施 (dāna) すると、(4)

教説を恭敬して聴聞 (śravaṇa) すると、(5)自ら読誦 (vacana) すると、(6)同様に理解し、受持 (uddeśa) すると、(7)正説を広く音声によつて諷誦 (svādhyāya) すると、(8)他人に広く解説 (śāh-prakāśana) すると、(9)独り寂靜処に行き、思惟 (cintānā) し、思量し、觀察すると、(10)修習 (bhāvanā) を為すによつて随入することである」(影印北京版111卷76—1—8)

この瑜伽論チベット訳の記述は瑜伽論の漢訳(大正三〇、七〇六下)とも、ほぼ一致している。

さて、この瑜伽論の記述を中辺分別論の所説と対比すると、第七と第八とが入れ代わつていることにすぐ気がつくであらう。その他、撰大乘論、彼修差別分や、顯揚聖教論第三などにも、十種法行は説かれているが、一一の説明はない。また般若系統の經典、勝天王般若波羅蜜經卷七付属品第十六にも次の如く説かれている。

「何等為十。一者書写。二者供養。三者流伝。四者諦聴。五者自説。六者憶持。七者広説。八者口誦。九者思惟。十者修行」(大正八、七二五上)

この勝天王般若經を先の中辺分別論等と対比すると、第三流伝は大乘莊嚴經論の所説と一致し、第七、第八は中辺分別論の所説と一致している。(紙数制限により対照表は略す)

さて、この十種法行の起源は何処にあるのであろうか。私はすでに八千頌般若や法華經の中に、その源流が見出されるように思う。すなわち、八千頌般若には次の如く説かれている。

「この深い意味のある知恵の完成を聞き、習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦し、書写し云々」(大乘仏典2、二七三頁参照)

こじ sroṣṭvanti (聞く) は十種法行の śravaṇa (聴聞) に、
udgrahṣyanti (掘る) は udgraha (受持) に、 vacayisyanti (唱え
る) は vacana (説誦) に、 svādhyāsyanti (説誦する) は svādhyāya
(諷誦) に、 lihṣyanti (書写する) は lekhaṇa (書写) にそれぞ
れ相当すると思われる。従つて十種法行の中の五種は、すでに八千
頌般若において説かれていることにならう。

次に法華經にも八千頌般若と同じような記述があるので考察して
みよう。すなわち、第四法師品には次の如く説かれている。

「この法門からわずか一詩頌でも受持し、説誦し、説明し、体得
し、書写し、書写して記憶し、ときおり注意深く吟味するとしよ
う」(大乘仏典5、八頁参照)

こじ vacayisyanti (説誦する) は vacana (説誦) に、 prakā-
śayisyanti (説明する) は prakāśana (解説) に、 lihṣyanti (書
写する) は lekhaṇa (書写) に相当すると思われる。 saṃgraha-
viśyanti (体得する) は udgraha (受持) と関係がありそうである。
次に同じく法華經の勸持品では次の如く説かれている。

「世尊ご自身の威神力をかりて、この法門をすべての衆生たちに
書写させ、説誦させ、考察させ、説きひろめさせるでしよう。」

(大乘仏典5、五八頁参照)

こじ lebhayisyāmaḥ (書写させる) は lekhaṇa (書写)
に、 cintāpayisyāmaḥ (考察させる) は cintana (思惟) に、
prakāśayisyāmaḥ (説きひろめさせる) は prakāśana (解説)
に相当すると思われるが、 pāṭhayisyāmaḥ (説誦させる) は
は意味内容からいえば vacana (説誦) に相当するのではなからう
か。かくして十種法行の中の七種までを、八千頌般若や法華經の記

述の中に見出すことが出来る。

また、この法華經の記述は、五種法師、即ち一に受持、二に説、
三に誦、四に解説、五に書写といわれるもので、この五種法師が十
種法行の源流とも考えられるが、五種法師という言い方が何時頃か
らいれ出したかが問題となる。そこでここでは、五種法師に相当
する梵文法華經の記述が十種法行の源流であるということにとどめ
ておきたい。そして智度論では、この五種法師の中の、第一受持を
「受と持」とに分けて、次の如き六種法師が説かれている。

「信力の故に受け、念力の故に持ち、文を見、或は口に受けるが
故に説むと言ひ、常に得て忘れざるが故に誦し、宣説するが故に
説と爲し、經書は了し難きが故に義を解す」(取意、大正二五、四
六一上)

これらの五種法師や六種法師の分け方や、解釈の仕方は、いか
にも漢訳独特のもののように感ぜられる。そしてこの五種法師の中
で、受持は意業、説・誦・解説は口業、書写は身業であるとされる。
さて、この十種法行の順序であるが、私はこれは修行の段階と関
係があるように思う。即ち、經文を書写し供養し他に施し、そして
聴聞し読み受持し、それを解説し暗誦し思惟し修習するのである。
そこには修行の段階の階梯が感ぜられる。

以上、私は十種法行の源流が八千頌般若や法華經に見出されるこ
とを指摘したが、それでは、いつ頃から十種法行ということがいわ
れ出したのであろうか。かつて論じた如く、中辺分別論の所説の中
には十でまとめているものが多い。そこには、あるいは十地經など
の十地の思想との関連があつたのかもしれないが、この点について
はまたの機会に論ずることにしたい。(註はすべて省略した)